

エリウゲナの自筆写本をめぐって

今 義 博

私が報告するのは、九世紀の哲学者・神学者・詩人であるエリウゲナの自筆の筆跡が奇跡的に今日に伝存することが確認された経過のあらましである。すなわち、エリウゲナの著作の九世紀の写本に、後から新たに訂正・削除・追加された文言のうちに著者自身の筆跡が確認されるに至った経過について報告したい。

エリウゲナの自筆の書き込みが認められたことによって、私たちが最近まで利用してきた彼の主著『ペリピュセオン』のシェルドン・ウィリアムズ版¹⁾は——全五巻中、第五巻は未刊だが——もはやテキストとしての資格を失った。というのは、シェルドン・ウィリアムズはエリウゲナの自筆テキストとそうでないテキストを混同しているからである。それに代わって新たに完成を見たジョノー版『ペリピュセオン』¹¹⁾はエリウゲナの自筆部分を明示して、エリウゲナ研究に新しい基礎を提供した。

本報告は主に É. Jeuneau and P. E. Dutton, *The Autograph of Eriugena* (Brepols, 1996) にもとづき、それに私の知見を少し加味したものである。ここでは紙幅上、エリウゲナの自筆性の論証の具体的な中身については多くを割愛せざるを得なかった。この点も含めて、本報告に関して詳細を知りたい方は本書をご参照願いたい。

Ⅰ トラウベの問題提起

エリウゲナの自筆問題を最初に提起したのはドイツの中世古文書学者ルート

ヴィヒ・トラウベ¹¹⁾である。彼は 20 世紀初頭にエリウゲナの主著『ペリピュセオン』の二つの重要なバンベルク (Bamberg) 写本 *Philos. 2/1* とランス (Rheims) 写本 875 に、アイルランド風の島嶼体 [insular script; アイルランドで発達し、のちブリテン島、大陸に広まった] ([] は筆者の補い) で書かれた加筆、訂正、欄外標題があることに注目し、これらは著者自身の手書きによるものであるとの結論に達した。やがて彼は弟子のエドワード・ランド¹²⁾が出版した本の序文で次のように述べた。

我々はヨハネス [エリウゲナ] の諸著作の諸写本から彼の筆跡を知る。それはアイルランドの学識者の特徴ある筆跡であり、[中略] それは書かれた語句について強い調子で、考察を加えながら、また表現豊かにとぎれとぎれに書かれている。それはほとんど [書写手法上の] 略語を使わず、使った場合でもそれは時々、私的にこしらえたもので、容易に理解されるものである。この筆跡が私には非常に好ましく思われ、はっきりと読みやすいのは、それを発見したことがうれしいからだけではない。私は、ホルバインが描いた [ルーブル美術館所蔵のデッサンの] ように、マルコ福音書の註釈を書いているエラスムスの手を眼前に見ているかのようだ¹³⁾。

しかし、その後、トラウベはその古文書学的な論拠を詳しく説明する論文を準備している最中に死去した。

II ランドの新説

ランドは当初、師トラウベがエリウゲナの自筆を発見したことを疑わなかったが、自ら写本を再調査しトラウベの研究を吟味するうちに、トラウベが発見したとしたものは実はエリウゲナの自筆ではなかったと考えるに至った。ランドはランス写本 875 を調査して、写本の訂正には五種ないし六種の筆跡があることを突き止めた。特にランドに印象深かったのは、カロリング朝書体の写本筆写者たちの幾人かが、トラウベがエリウゲナと目した人物と一緒に居ながら

書いていると思えたことである。また、トラウベがエリウゲナと目した人物はいくつか綴りの間違いを犯しており、しかもそれはエリウゲナほどの学識者が犯す類のものではありえないと思われた。それに加えて、トラウベがランス写本に発見したアイルランド風の島嶼体の筆跡は一種類ではなく、二種類あることにランドは気づいた。こうしてランドは次のように述べるに至った。

我々は考察の結果、いまや非常に驚くべき結論に立ち至った。すなわち、その本のうちに二種類のアイルランド風の島嶼体があるということである。第一の書体を私は i^1 と呼ぼう。それは緩やかで、先のとがった、なだらかな、特にアイルランド風の筆跡に独特な略字ないし連字をわずかに用いている。わずか一つないし二つの例外はあるが、カーブした縦軸の d の字を使っている。もう一つの書体はよりコンパクトで規則正しく、より多くカーブしていて、特にアイルランド風の特徴をより多く備えている。それはまっすぐな縦軸をもった d を使っている。さらに、二つの筆跡は写本の異なる部分に現れている¹⁾。

ランドは二種類のアイルランド風の島嶼体のうち i^1 がエリウゲナのものだといっただけは結論づけたにもかかわらず、すぐにその結論を捨て、最終的に次の結論に至る。

- 1) エリウゲナの写本に挿入された訂正、追加、増補には二種類のアイルランド風の島嶼体の筆跡 (i^1 と i^2) がある。
- 2) i^1 も i^2 もエリウゲナの筆跡ではない。

上の結論 1) は、これらの写本のすべての研究者に受け入れられている。そこで、 i^1 と i^2 の二つの筆跡と著者との関係に関しては次の四つの仮説があり得ることになる。

仮説 I : i^1 も i^2 もエリウゲナの筆跡ではない。

仮説 II : i^1 も i^2 もエリウゲナの筆跡である。

仮説 III : i^2 がエリウゲナの筆跡である。

仮説 IV : i^1 がエリウゲナの筆跡である。

III ジョノーの研究

ジョノーは以上の四つの仮説のどれが事実として成り立つのか検討し始めたが、その後、ジョノーとダットンの前掲書が公刊された時点ですでに 20 年以上が経ち、その間の研究の前進によって、四つの仮説のうちのただ一つの仮説しか成り立たないことを明確に示すことが可能になった。以下、その経過を概観する。

III (i) 仮説 I : i^1 も i^2 もエリウゲナの筆跡ではない

仮説 I はランドが 1920 年に出した結論であるが、その後の古文書学は彼のアイルランド風の島嶼体の調査が不完全なものであったことを明らかにした。ランドの議論は次のようにまとめられる。

- 1) エリウゲナのもとの「想定された自筆」は綴りの間違いを含んでいる。
- 2) それは『ペリピュセオン』の著者が犯すような種類の間違いではないだろう。
- 3) 『ペリピュセオン』の最も重要な写本の一つであるランス写本 875 の中の i^1 と i^2 は、カロリング朝時代の写本筆写者たちと一緒に書かれた。
- 4) 彼らは別々の折帖 (quire) [4 枚綴りの羊皮紙] に書いた。

1) と 2) で問題にされた綴りの間違いは、ランドがアイルランド風の島嶼体とカロリング・ミナスキュール書体 (Caroline minuscule) [一種の小文字の草書体] を混同したために生じたものである。つまり、その綴りの間違いを犯したのはカロリング朝時代の写本筆写者だったのである。

3) と 4) とに基づいて、ランドは次の問題を提起した。

もし i^2 がヨハンネス [エリウゲナ] のものであったとすれば、なぜその書き手は i^1 で書かれた部分を修正しなかったのだろうか? [中略] しかし、もし我々が i^1 はエリウゲナのものであると考えるのであれば、なぜ彼は i^2 で書かれた部分に登場しないのか、という問題が生じる^{vii)}。

しかし、ジョノーによれば、ランス写本にある i^1 は i^2 で書かれた部分では使われておらず、また i^2 は i^1 で書かれた部分では使われていない、というのは全く厳密さを欠いている。ジョノーは、 i^1 だけで i^2 は全く現れていない、あるいはいくつかの欄外標題の著作にのみ現れているに過ぎない、とランドが言う折帖からわざわざ選んで、 i^1 で書かれた折帖でも i^2 で訂正されている箇所があり、逆に i^2 で書かれた折帖でも i^1 によって訂正と追加がなされていることを例示した。こうしてランドの論拠は崩れた。

III (ii) 仮説 II : i^1 も i^2 もエリウゲナの筆跡である

これは故シェルドン・ウィリアムズの見解であった。彼は自編の『ペリピュセオン』第一巻の序文でランドの論拠を二つにまとめている。一つは、アイルランド風の島嶼体による増補は、エリウゲナが犯しそうな間違いを含んでいるということ。もう一つは、これらの増補には多くの筆跡で書かれたものがあるということ。ランドのこれらの論拠に対してシェルドン・ウィリアムズは次のように答えている。

ルートヴィヒ・トラウベの説に反対する [ランドの] 論拠に関しては、最初のは直ちに退けられる。最も偉大な学識者といえども本の欄外に走り書きで注釈する場合にはケアレス・ミスは犯すもので、増補部分の中の間違いはこのタイプのものであるからである。第二のものは、エリウゲナは必ず同じ筆跡で書いたと想定しているが、それは真実だとは限らな

い^{vifii}。

シェルドン・ウィリアムズの最初の見解はあり得ることと認めなければならない。彼の第二の見解は i^1 と i^2 の違いを退けたが、彼は『ペリピュセオン』の自分の新しい校訂版でアイルランド風の島嶼体とカロリング・ミナスキュール書体を混同している。従って、彼の校訂版には i^1 の記述も i^2 の記述もエリウゲナのものとして含まれている。 i^1 だけがエリウゲナの筆跡であるという結論が出た今日では、シェルドン・ウィリアムズ版に基づいた議論はできなくなった。

III (iii) 仮説III： i^2 がエリウゲナの筆跡である

第三の仮説は古文書学者故ベルンハルト・ビショップ¹⁹⁾が一度は擁護し、ジョノーも一時受け入れたことのある見解である。ジョノーは1971年、ラン(Laon)市立図書館の写本81にあるアイルランド風の島嶼体 i^1 はエリウゲナのものなのか、それとも彼の秘書の一人のものなのかという問題に直面し、ビショップに相談した。ビショップは i^1 と i^2 の二つのアイルランド風の島嶼体の筆跡が同一の筆者、つまりエリウゲナのものであると認めることはできないとした。その後、ビショップは i^1 と i^2 の二つのアイルランド風の島嶼体の筆跡を含んでいることで知られていた諸写本を調査して、 i^2 の方がよりエリウゲナの自筆らしいという結論に達した。その根拠は、 i^2 の方が i^1 よりも多くの写本に書かれており、 i^2 で書かれた様々な写本は様々な場所で書写され、また書写には長時間を要したため、エリウゲナが同じ「秘書」を連れて長期間に渡って多くの場所にいることができたとは想像しがたいと彼が思ったからである。しかし、ビショップもジョノーもこの結論に落ち着いたわけではなかった。

III (iv) 仮説IV： i^1 がエリウゲナの筆跡である

ケンブリッジの古文書学者テレンス・ビショップ (Terence A. M. Bishop 1907-1994) は、1973年、ジョノーと会ってエリウゲナの自筆問題に関心を持ち、エリウゲナの著作の諸写本に含まれるアイルランド風の島嶼体の筆跡を研

究して、 i^2 はエリウゲナの筆跡ではあり得ないという結論に至り、やや後に i^1 がエリウゲナの筆跡であるかもしれないと認めた。しかし、彼は「その書き手がギリシア語の綴りを間違えている」という理由から、 i^1 もエリウゲナの自筆とは認めきれなかった。ピショップはより綿密な研究によって、1974年6月、ジョノーに「 i^1 の書き手は多分エリウゲナである」と語り、同年12月の手紙でピショップはその見解を確認し、いっそう強調した。この結論は1975年3月にオックスフォードでの講演で「 i^1 はヨハネス・スコトゥス [エリウゲナ] の自筆と同定されうると思われる」とされた。1975年7月、ランでのエリウゲナ国際コロキウムでピショップはより完全な論文を発表し、 i^1 と i^2 の二種類のアイルランド風の島嶼体の筆跡が存在することを認めた上で、 i^1 がエリウゲナの筆跡であるとした。

i^2 の方がより多くの写本に使われているという理由で i^2 の方を選んだピショップに対して、ピショップは次のように述べた。

i^2 が使われている写本の数が多いということが決定的に優先されるべきであろう。だが、これは程度の優先であって、類別の優先ではない。多分たまたま残存したためであり、あるいは逆のことがありえたかもしれない。 i^2 が使われている写本の数は絶対的に多いわけではない。それに i^2 で書かれているすべてのものが確かに紛れなくヨハネス [エリウゲナ] の書いたものだというわけではない⁴⁾。

ピショップは i^2 の記述を追加・置き換え、欄外註、小見出しの三つのグループに分けて分析した結果、 i^2 に、「思想を心の中でまとめようとしながら自分の思想を綴っている著者」というよりは、むしろ職業的な写本書写者であることを示す特色を見出し、ランドに同調して次のように述べた。

ランドは次のように述べている。 i^2 には特に学識者らしいものは何もない。思索と著述の行為をその時々につなげるものを示すものは全く何もない。

それは経験豊かな写本書写者の筆跡であり、それにもかかわらず、すべての間違いと綴りの間違いも非常によいものだ^{x1)}。

それとは対照的に、ビショップには i^1 の書き手は学識者の筆跡の特徴を持っていると思われた。彼が i^1 と i^2 のスタイルを対照的であるとするのは次の理由からである。

- 1) i^1 の書き手が「参照記号」を改善しているように思われるのに対して、 i^2 の書き手はかなりの範囲で優雅な形を保っており、書写者としての技術的なレパートリーを持っていて、それは i^2 が実質的に貢献しているすべての写本に絶えず繰り返し現れている。
- 2) i^1 の書き手にも書き間違いはあるが、それらのうちには i^1 によって訂正されたものがある。
- 3) それらの書き間違いは、エリウゲナのような著者から予想されるような「せっかち」の結果として説明できる。

そしてビショップはランのエリウゲナ国際コロキウムで「これまで検討した証拠に基づいて i^1 はヨハンネス・スコトゥスの自筆と同定されうと思われる」と、再び同じ主張をした。

ビショップの発表を聴いていたビショップは同学の士の結論を支持して、以前に彼を誤解していたことを詫び、 i^1 に関する自分の新しい発見を披露した。

トラウベとランドは i^1 と i^2 を含む写本を四つ知っていたに過ぎないが、ビショップは他に六つの写本を発見した。かくて i^1 または i^2 を含んでいる写本は十二である。そのうちの一つが i^1 と i^2 の両方の筆跡を含んでおり、四つが i^1 の筆跡を含み、七つが i^2 の筆跡を含んでいる。いずれも九世紀に書かれたものばかりである。これらの写本についてジョノーとダットンは詳細に解説しているが、ここでは省く。

IV i^1 の筆跡と i^2 の筆跡の特徴

i^1 の筆跡と i^2 の筆跡についてのダットンダットンの解説の要点を紹介しておきたい。まず、その二つの筆跡を区別するのは容易ではない。二つとも似たアイルランド風の島嶼体の筆跡であり、どちらにも読み手をときどき混乱させる変形があるからである。 i^1 の書き手も i^2 の書き手も正しく書かないときがある。筆跡の特徴は、第一に、両者はあまり草書体を使わずにせかせか急いで書いた。第二に、両者とも書き手のペンは羊皮紙にゆっくり留まっておらず、文字と文字がぶつかり合っている。もし書き手が与えられたテキストを単に書写するつもりなら、書写する範囲などを予測しながら書くだらうが、 i^1 も i^2 も必ずしもそういう書き方をしていない。二つの書体はカロリング朝風ではない。だが、大陸式書体の趣は i^2 よりは i^1 のほうにはっきり出ている。二つの書体の変形を示すのは容易である。どの文の書き出しも頭文字で大きく堂々と書かれている。省略はほとんどなく、字の角度は普通よりは立っており、驚くほどには角張ってはいない。 i^1 の小文字草書体は中くらいの大きさで、著しく角張ったアイルランド風の島嶼体である。

V 文献学的アプローチ

ジョノーは i^1 と i^2 について、編集作業、文法的訂正、文体的変更、様々な追加などの領域に分けて、それらの筆跡の文献学的意味を解き明かしているので、簡単に紹介しておきたい。

V (i) 編集作業

ここでの編集作業とは、テキストの内容よりは、むしろテキストの提示に関する何らかの介入のことである。写本には著者が自分の著作に註釈したり、欄外で自著を自讀したり、自分が書いた文の文法構造について初歩的な情報を提供したりする編集作業が見出される。

ランス写本 875 とバンベルク写本 *Philos.* 2/1 に見出される編集作業は、欄

外標題と欄外副題の追加，著者参照指示，相互参照指示，註釈，構文解析記号 (construe mark) [点やダッシュ]，文法情報からなる。

ジョノーによれば， i^1 と i^2 の書き手によってなされた編集作業を調査したおかげでエリウゲナの自筆についての研究が前進できた，という。

A 欄外標題と欄外副題 欄外標題の導入は主に i^2 の書き手がやっている。ランス写本 875 の『ペリピュセオン』に i^1 の書き手は二つの欄外標題を付け加えただけであるが， i^2 の書き手は十六の欄外標題を導入した。

『ペリピュセオン』の第一巻から第三巻までを含むバンベルク写本 Philos. 2/1 では， i^2 の書き手は 257 個の欄外標題を書き込んだ。 i^2 の書き手の主な仕事は標題を追加することだったことがわかる。

B 引用された著者の指示 i^1 の書き手はランス写本 875 の典拠表示のない引用にアウグスティヌスとニュッサのグレゴリオスからの引用であると加筆した。彼はまたエリウゲナがフィリオークエのラテン的革新に反対してカトリックの信仰信条とギリシア教父の権威という二つの論拠を挙げ，下欄外にはその信条がニケア信条であると明記し，ギリシア教父の教説がエピファニオスの *De fide* に見出されると明記した。他方，この写本で i^2 の書き手は何も補足していない。

『ペリピュセオン』を従来の校訂版で読む限り，我々はエリウゲナがある箇所 (*Periph.* II, 586 A) でニュッサのグレゴリオスとナジアンソスのグレゴリオスを混同したと思いこんできた。しかし，ランス写本 875 でエリウゲナは二人のグレゴリオスを注意深く区別していた。バンベルク写本 Philos. 2/1 で二人のグレゴリオスを同一人としたのは i^2 の書き手であった。

C 『ペリピュセオン』内での相互参照指示 ジョノーが相互参照指示といっているのは，ある著作の中でその同じ著作の別の箇所を読者に示すことである。ランス写本 875 では i^1 の書き手はほかの箇所への参照指示を皆 *alibi* (ほか

のところで) とか *alibi latius* (あとでほかのところで) とか *loco latius* (あとのところで) と曖昧に記している。

一方、ランス写本 875 の i^1 の書き手による相互参照指示は、『ペリピュセオン』がまだ執筆途中であったため、 i^1 の書き手の場合と同じく曖昧であり、原本の曖昧さを反映している。

しかし、バンベルク写本 *Philos. 2/1* では i^2 の書き手は『ペリピュセオン』全五巻を利用できる編集者としてその巻数を記すことができたにもかかわらず、彼は『ペリピュセオン』第五巻に対する参照指示を加えたり加えなかったりしている。 i^2 の書き手が書き加えなかった理由は、テキストを再生産する著者としてではなく、たんなる筆写者として振る舞ったから、と考えるのが妥当である。

それと反対に、 i^2 の書き手がバンベルク写本 *Philos. 2/1* で *alius disserendi locus est* (ほかのところで論じられる) という曖昧な句を *in quinto tractabimus* (第五巻で論じよう) に書き換えたとき、彼は編集者として振る舞ったといえる。

この相互参照指示に関する複雑な問題をジョノーはさらに詳説しているが、紙幅の関係から省略する。

D 註解 ランス写本 875 の欄外に i^1 の書き手によって書き込まれたと考えられ得るいくつかの増補には *glossa* の略字としての *glo* という副題は付いていない。他方、バンベルク写本 *Philos. 2/1* では i^2 の書き手は註解者として行動し、39 箇所 of 註解のうち 17 には題が付けていないものの、22 箇所の註解の頭には *glo* を付けている。また i^2 の書き手がランス写本 875 に書き入れた欄外書き込みは時々、文章のリズムを混乱させ、その文全体の調和には配慮していない。

E 構文解析記号 カロリング・ルネサンスにおいてアイルランド人の学僧たちが文字表記の上で果たした貢献は興味深い。 i^2 の書き手も『ペリピュセ

オン』のテキストを読む際に、文法の面に気を遣い、読者が難しい構文を解き明かす助けになる構文解析記号を用いた。例えば、バンベルク写本 *Philos. 2/1* にいくつかの構文解析記号を導入して、代名詞が受けている名詞を読者に容易に見分けられるようにしたり、関係代名詞が指す名詞がどれであることを示したり、名詞と形容詞の適切な格 (case) に関する情報を提供している。

V (ii) 正書法上の訂正

ジョノーは、 i^1 の書き手と i^2 の書き手による正書法上の訂正を「語と語の分離」「二重母音の復活」「筆写者の間違いの訂正」に分類して以下のように解説している。

A 語と語の分離 i^1 の書き手は本来結合してはいけない語と語を分離するのにコンマを使った。例えば、ランス写本 875 の f. 22v の 4 行目で、カロリング朝書体の筆写者は *eius modica usa* と書いた。 i^1 の書き手はこの無意味な句を *huiusmodi causa* と訂正し、*huiusmodi* と *causa* の間にコンマを入れた。 i^1 の書き手が誤読を防ぐために施したコンマを、この写本の最終版に責任を負う i^2 の書き手は見落としたか、コンマの意味が理解できなかったか、不必要と判断したかしたため書かなかった。

B 二重母音の復活 カロリング朝書体の筆写者たちは一般に二重母音を顧慮していない。彼らは *ae* の代わりにたんに *e* と書いたが、そういう箇所では i^1 の書き手は多くの場合、二重母音を補っている。彼は一般に *e* の下に尾ひれ (caudate) を書き入れている。 i^1 の書き手の二重母音の綴り方は必ずしも一貫していたわけではなかったし、見落としもあったが、注意深くやったと言える。それに対して、 i^2 の書き手は、二重母音にはあまり注意を払わず、わずかな箇所を訂正したにすぎない。

C 筆写者の間違いの訂正 ランス写本 875 で、例えば f. 297r の line 13 に

はカロリング朝書体の筆写者は *diminutissimis* と書いていた。それを *i*¹ の書き手は *de minutissimis* とした。この例でわかるように、*i*¹ の書き手は文が正しく読まれるように注意を払っている。他方、*i*² の書き手も時にはカロリング朝書体の筆写者の綴り間違いを訂正することもあるが、綴り間違いにそれほど神経を使ってはいないように見える。

V (iii) 文体の変化

ジョノーが「文体の変化」で意味しているのは、テキストの中の些細な間違いの訂正のことではなく、一文の中の基本的語彙と構造に対する重要な変化のことである。ランス写本 875 にある『ペリピュセオン』のテキストの中にアイランド風の筆跡で書き込まれた文体上の変化にジョノーは注目して、これらを三種類に分類した。

- A) 繰り返しを避けようとしたための変更。
- B) テキストの明晰さと精確さを改善しようとしたための変更。
- C) 目的はあまりはっきりしない様々な性質上、行われた変更。

A 繰り返しを避けようとしたための変更 これに関しては詳細はすべて省略して、結論だけを述べれば、*i*¹ の書き手は繰り返しを避けて文体の変更をたくさん行ったが、*i*² の書き手はそういうことは何もしていない。

B テキストの明晰さと精確さを改善しようとしたための変更 ジョノーは、*i*¹ の書き手がランス写本 875 に加えた変更の中には、エレガンスを犠牲にして、むしろ明晰さと精密さを求めたものがあるとして、その例を示しているが、要するに、*i*¹ の書き手はラテン語として文体の形式や美しさよりは、文法的にも構文的にも正しくて、文意が明晰かつ間違いなく理解されることを望んだという印象を受ける。

C 様々な性質上、行われた変更 「様々な性質」ということでジョノーが言いたいのは、i¹の書き手がランス写本 875 で行った文体上の変更の中で、その目的が直ちに明確ではないもののことである。これらに最も共通していることは動詞の時制と態における変更である。

i¹の書き手がカロリング朝書体で書かれたテキストを変更したケースがある。例文は略すが、元の写本では中世ラテン語に見られる *speculari* という動詞の受動形は、i¹の書き手の訂正では *speculatur* となり、*deponent* という古典的な用法に変えられた。

V (iv) 様々な追加

i¹の書き手はランス写本 875 で様々な種類の追加を行った。それらの追加部分には、ニュッサのグレゴリオスと証聖者マクシモスに対して *beatus* や *venerabilis* のような敬称を付け加えたものや、原典からの引用を示すために、*ait* と *inquit* という動詞も書き加えたものがある。これらは表現の正確さと読者の正しい理解にこだわったものであろう。

そのほかに、通常は行われなかったことだが、i¹の書き手は時々、引用文のさなかに突然、引用文とは関係のない註釈を挿入している。

また、興味深いことに、『ペリピュセオン』は師と弟子の対話篇であるが、その中で i¹の書き手は師と弟子という対話者の新たな区別を導入した。ある場合には、i¹の書き手は写本筆写者が省略したのをただ補うためだけに、師に対して大文字の N. (*Nutritor*) を、弟子に対して大文字の A. (*Alumnus*) を挿入した。そのほかの場合には、彼は A と N の記号を挿入したばかりでなく、あろうことか、新しい対話までも導入した。その種のことは著者その人ならやっても不思議はないが、著者ならぬ写本筆写者なら領分を超えた行為である。

ランス写本 875 の f. 285v [*Periph.* IV 768B-C] には、上の欄外から始まって左の欄外に続く長い註釈が四層をなして書かれている。

第一層 (*Nec ueeor eos ... circa substantiam*) と第三層 (*ibi siquidem simplex ... partium superans*) は二人の異なる筆写者がカロリング朝書体の小

文字で書いたものである。第二層 (ex his quae per generationem ... nihil horum est) と第四層 (dum de ea ... negat quid esse) は i^1 の書き手が書いたものである。

これらの層はどれも先行する層の考えを完成させるために続けて加筆されたものである。これらの異なる筆跡の加筆は、写本が一人の筆写者からほかの筆写者へ渡ったことを示しているばかりでなく、先行の層で書かれた内容を拡充する目的で、そのテキストが時々著者に戻されたことも示している。つまり i^1 の書き手が書いた元のテキストがカロリング朝書体のある筆写者に渡されて、その筆写者が第一層を加筆した上で、その写本が i^1 の書き手に戻されて第二層が加筆され、さらにその写本がカロリング朝書体の別の筆写者に渡されて第三層が加筆され、その写本がもう一度 i^1 の書き手に渡されて第四層が加筆されたのである。

ランドは、この加筆に加わった三人が同じ所で同時に仕事をしたと考えたが、もしそうだとしたら、写本をわざわざ三人の書き手に回す必要はなかったはずである。ランドの想定は受け入れがたい。

VI エリウゲナの筆跡

前に上げた四つの仮説に戻ろう。それは次のものであった。

仮説 I : i^1 も i^2 もエリウゲナの筆跡ではない。

仮説 II : i^1 も i^2 もエリウゲナの筆跡である。

仮説 III : i^2 がエリウゲナの筆跡である。

仮説 IV : i^1 がエリウゲナの筆跡である。

以上の説明から明らかなことは、まず i^1 と i^2 とは別の筆跡であり、仮説 II は成り立たない。

仮説 I はランドの見解で、その要点は次のようであった。

- 1) 「エリウゲナの自筆と想定されたもの」は綴りの間違いを含んでいる。
- 2) i^1 と i^2 は別々の折帖に書かれている。
- 3) i^1 はカロリング朝書体の写本書写者の力を借りている。

1) の「エリウゲナの自筆と想定されたもの」はアイルランド風の島嶼体だとランドは考えたが、実はそれはカロリング朝書体の筆跡であるから、1) の論拠は崩れる。

2) については i^2 に「属する」とされた折帖にも i^1 が書かれているし、その逆もあることが示されたので、この根拠も崩れる。

3) ランドが i^1 の書き手とカロリング朝書体の写本書写者たちとの協力だとしたものは、実は i^1 の書き手が少なくとも二度写本に立ち帰ったのであって、 i^1 の書き手がカロリング朝書体の写本書写者たちと一緒に仕事をしたのではない。3) の論拠も崩れる。

そこで、仮説 III と仮説 IV のどちらが正しいかが問題になる。結論は、 i^2 はエリウゲナのものではなく、 i^1 がエリウゲナのものである。以下にそのことを説明したい。

VI (i) i^2 はエリウゲナのものではない

ジョノーとダットンによれば、 i^2 が見出される諸写本のなかで、 i^2 の書き手は写本書写者、編集者、註釈者などの幾つかの役割を果たしている。仕事の大部分において彼は写本書写者として訓練されていることを示している。彼は時間と羊皮紙を節約するために、あらゆる写本上の略語と参照記号を使い、多くの合字を駆使した。ビショップは、彼の筆跡は「熟練した写本書写者であり、それにもかかわらずミスや綴り間違いがあるが、それらはすべて非常によいものである^{x11)}」と述べている。

i^2 の書き手はランス写本 875 の XI-XIV 折帖の部分に増補したとき、それを主文欄外の枠内に整然と収めることができた。このことは、彼が原本を見て、自分が書写すべき増補の分量を予め知っていたことを示しているであろう。

i²の書き手は『ペリピュセオン』の写本であるランス写本 875 とバンベルク写本 Philos. 2/1 で、テキストをより読みやすくするために語の格 (case) をわざわざ指示したが、『ペリピュセオン』の著者自身がそのようなことをするだろうか？

バンベルク写本 Philos. 2/1 の中の i²の書き手は註釈で『ペリピュセオン』の著者 (エリウゲナ) を時に第三人称で引き合いに出しているが、著者本人が自分の著作で自分のことを第三人称で語ったりするだろうか？

バンベルク写本 Philos. 2/1 で、i²の書き手は、自分が手を加えている著作 (『ペリピュセオン』) を形容詞の最上級を三回も使って賞賛している。著者が自分の著作を、しかも自分の著作の中で絶賛したりするだろうか？

また、すでに指摘した通り、i¹の書き手はニュッサのグレゴリオスとナジアンゾスのグレゴリオスを区別していたのに、i²の書き手は両者を混同した。

さらに重要なことは、ランス写本 875 とバンベルク写本 Philos. 2/1 で i²の書き手は写本書写者として、また編集者として働いたが、全体的に彼は著者として行動していない。筆写しながら同時に考え、考えながら筆写するというような著者としての振る舞いは i²の書き手のどこにも窺われない。彼はエリウゲナではないというほかはない。

VI (ii) i¹ の書き手がエリウゲナである

古文書学の研究により i¹の書き手は職業的な写本書写者ではないという結論が得られている。彼は専門の写本書写者が常用する略語も合字もほとんど使わず、彼の使ったわずかな略号はありふれたものであった。

i¹には急ぎ書きの形跡がある。i¹の書き手はテキストをあまりに急いで訂正したため、テキストを完全に直すことができないこともあった。不完全な削除、参照記号のミスマッチ、未完成の訂正がある。ピショップが述べた「衝動的な書き方」の例をジョノーとダットンは詳細に論じているが、ここでは省く。急ぎ書きはたんに書き手のせっかちな性格だけでなく、彼が考えに没頭しつつ書いたこともよく伺わせると私は思う。

興味深いことがある。エリウゲナは第四巻を書き始めたときでさえ、第四巻で『ペリピュセオン』を終りにできると考えて、「この第四巻を最後としよう」と書いた [743 C]。どういうわけか、この言葉はあとでも削除されず写本に残った。

i²の書き手は、『ペリピュセオン』第一巻、第二巻、第三巻のランス写本 875 とバンベルク写本 2/1 に、第四巻と第五巻に対する参照指示を書き加えたとき、第四巻と第五巻が完成されたことを知っていたにもかかわらず、彼は編集者として振る舞いながらもそれらの箇所を追記することを怠った。他方、i¹の書き手が著者として振る舞って参照指示を加えたときは、彼はまだ第五巻が書かれるかどうか知らなかった。

『ペリピュセオン』の欄外書き込みでの i¹ と i² のもう一つの違いは、i² の書き手は時折、著者エリウゲナを三人称で語るのに対して、i¹ の書き手は決してそういうことはしなかったという点である。

ほかにも様々な議論の末に、ジョノーは、結局、ランス写本 875 の『ペリピュセオン』とラン写本 81 の『ヨハネ福音書註解』における i¹ の書き手の行動を説明するには次の三つの道しかないという。

- 1) i¹ の書き手は原本を写した。
- 2) i¹ の書き手は口述を書き取った。
- 3) i¹ の書き手は書きながら、同時に考えた。つまり、彼は書きながらテキストを作った。

1) と 2) の説明は i¹ の書き手の行動を説明できないので、3) が残る。

VI (iii) i¹ の書き手は原本から写したのではない

i¹ の書き手がランス写本 875 とラン写本 81 という二つの写本の欄外に増補し始めたとき、彼は自分の増補がどれほど長くなるか予測していなかったにちがいない。また、ランス写本 875 に無数の小さな文体上の変更が見出される。

これらのことは*i*¹の書き手が原本から写していたのではなく、書くことと考えることを同時に行ったことを示唆する。

VI (iv) *i*¹は口述を筆記したのではない

もし*i*¹の書き手が口述筆記したなら、彼の書いたものには、特に間違っただけの口述や聞き取りによって引き起こされたような誤りを見つけ出せるであろうが、その種の誤りはない。さらに、もし口述筆記したのであれば、*i*¹の書き手は小さな、錯綜した文体上の多数の変更を行うことはなかったであろう。ジョノーとダットンによれば、*i*¹の書き手が、速く効率のよいやり方で口述筆記することを可能にする筆記者としての訓練を受けたことを示唆するいかなる証拠もない。彼の筆跡には専門の写本筆写者には常識である合字と略字がほとんど現れない。*i*¹の書き手が口述筆記した可能性を、仮定のレベルでさえ、まじめに考える古文書学者はいない。

VI (v) *i*¹の書き手は、書きながらテキストを作った

以上のことから、*i*¹の書き手は同時に書いて考えた、言い換えれば、著者として振る舞ったと結論するしかない。ランス写本 875 とラン写本 81 で *i*¹ の書き手が行った加筆、訂正、削除などは最もエリウゲナらしい特徴に属している。もし *i*¹ の書き手がエリウゲナでないとしたら、エリウゲナと同じように考えるが、しかしエリウゲナとは別の人物、つまりエリウゲナの代役を果たせる人物だと結論しなければならない。そうだとすれば、『ペリピュセオン』の相当量がこの代役に帰せられることになり、従って『ペリピュセオン』はエリウゲナの真作ではないということになる。 *i*¹ をエリウゲナの筆跡とするのが最も妥当である。

我々が *i*¹ の筆跡において見出したものは、我々がエリウゲナ自身について知っていることと一致する。すなわち、一貫したギリシア語に対する関心、ランス写本 875 の『ペリピュセオン』とラン写本 81 の『ヨハネ福音書註解』に見られる自分の思想を絶えず洗練し、明確にしようとする欲求である。

注

- i) I. P. Sheldon-Williams & Ludwig Bieler (eds. & trans.), *Iohannis Scotti Eriugenae Periphyseon (De diuisione naturae)*, i-iii, SLH 7, 9, 11 (Dublin, 1968-81). Édouard Jauneau (ed.), J. J. O'Meara & I. P. Sheldon-Williams (trans.), *Iohannis Scotti Eriugenae Periphyseon (De diuisions naturae) liber quartus*, SLH 13 (Dublin, 1995).
- ii) Édouard Jauneau (ed.), *Iohannis Scotti seu Eriugenae Periphyseon*, 5 vols., CCCM 161-5 (Turnhout, 1996-2003).
- iii) Ludwig Traube 1861-1907. ドイツで最初の Mittellatein の講座をつくった。Göttingen 大学の Wilhelm Meyer と並んで中世ラテン語文献学の樹立者の一人。Monumenta Germaniae Historica の編集主幹も務めた。
- iv) Edward K. Rand 1871-1945. 米国人。ハーバード大学卒業後、ミュンヘンのトラウベのもとでポエティウスを研究。のちハーバードに戻る。The Medieval Academy of America 初代会長、雑誌 *Speculum* の初代編集者。
- v) E. K. Rand, *Johannes Scottus*. i. Der Kommentar des Johannes Scottus zu den Opuscula sacra des Boethius. ii. Der Kommentar des Remigius von Auxerre zu den Opuscula sacra des Boethius, *Quellen und Untersuchungen zur lateinischen Philologie des Mittelalters*, Vol. I. 2, München 1906, p. ix.
- vi) E. K. Rand, "The Supposed Autographa of John the Scot," in *University of California Publications in Classical Philology* 5, 1918-1923, no. 8, p. 140.
- vii) *Ibid.*, p. 140.
- viii) *Periphyseon*, ed. I. P. Sheldon-Williams, I, pp. 7-8.
- ix) Bernhard Bischoff, 1906-1991. Paul Lehmann に嗣いで 1953 から 1974 までミュンヘン大学の Lateinische Philologie des Mittelalters の教授。1953 年に Monumenta Germaniae Historica (MGH) の Zentralkommission に就任。
- x) T. A. M. Bishop, "Autographa of John the Scot," in *Jean Scot Érigène et l'histoire de la philosophie*, Paris 1977, p. 91.
- xi) *Ibid.*, p. 93.
- xii) *Ibid.*, p. 93.

司 会

中 川 純 男

E. ジョノーは Corpus Christianorum におさめられたエリウゲナ『ペリピュセオン』の校訂者であり、同叢書の補遺ともいえる *The Autograph of Eriugena* の執筆者